Japanese Journal of Applied Psychology
2013, Vol. 38, No. 3, 297–308

実践報告

描画を通して行われた喪の作業

須田　誠*

Mourning Works through Drawing

Makoto SUDA*

This article is the analysis of a crisis intervention conducted for a certain girl and her father. After her mother died of an illness, the girl started exhibiting problem behaviors such as social withdrawal (hikikomori) and shoplifting. Her father was also exhausted. They had evidently not finished mourning for their loss. To address this issue, the author first counseled both the girl and the father to aid recovery. In the session with the girl, the author incorporated drawing into the process and she was encouraged to weave a story based on her drawing. Second, her drawing and the story were used in her father's interview to encourage conversation about their loss and help them come to terms with it. As a result, the girl and her father were able to complete the mourning process. They overcame their maladaptive mourning and resumed their normal lives.

key words: mourning work, crisis intervention, social withdrawal (hikikomori), drawing,story telling

問　　題

“ニックは，やさしく言った。「悲しみを感じるほうが，何も感じないより，ずっといい…」（略）ニックはうつむいて，長い息をはいた。肩の力を抜いて，からだをリラックスさせる。自然に言葉が出てきた。「母さんは…」 言えたのはそこまでで，あとは涙になってしまった。ニックは，ジャスティンの腕のなかに身を投げ出した。「母さんは死んだ。ずっと前に，死んだ。なのに，僕はそれを認めないで，みんなにつらい思いをさせてきた…」 ジャスティンは，いま聞いていることが信じられなかった。泣きじゃくるニックを，しばらくじっと抱えていた。そして，言った。「そうね，ニック。お母さんは亡くなったわね」”

これは，アメリカの児童文学者：Lamb（1995，土屋京子訳，1995）による小説：『The End of Summer』の一場面である。母親の死を受け容れられずに，母親が生きているかのように振る舞ってきた12歳の少年：ニックが，叔母：ジャスティンに母親が死んだことを認める場面である。ニックは愛猫の「ザ・ゴースト」が不治の病気で苦しんでいる様を見て苦悩し，ザ・ゴーストの安楽死を決断し実行する。その直後に，彼は叔母に母親が死んだことを認めたのである。それを聴いて，叔母もまた動揺する。彼女にとって「甥の母親の死」は「自分の姉の死」をも意味するからだ。

人間関係に死別はつきものである。親子もいつか必ず死別する。一般的には，親が先に死ぬ。しかし，それは子どもが自立した段階，つまり，ライフサイクルで言えば子どもの中年期以降であることが圧倒的である。子どもが思春期の時には，心理的に親から分離して内的な対象喪失 (object loss) を経験することで成長をしてゆく。しかし，それが現実的な対象喪失である場合は，子どもはどのような反応

* 福島学院大学福祉学部
Faculty of Welfare, Fukushima College, 2-10 Motomachi, Fukushima-shi, Fukushima 960-8505, Japan
e-mail address: suda.makoto@fukushima-college.ac.jp

を示すのであろうか。また，子どもにとっての親の死別は，妻あるいは夫にとっては配偶者との死別を意味する。遺された配偶者はどのような反応を示し，どのように子どもと接するのであろうか。

本稿では，母親との死別後にひきこもりを呈した少女に対するカウンセリングと，彼女に対応できずに困惑する父親に対するカウンセリングの事例を紹介する。この両者とも“愛着の対象を失ったことに対する悲哀 (mourning) の心理過程”（小此木，1979）にあった。通常，愛する対象を失った時，人はその事実を否認したり，怒りや恐怖や絶望等の複雑な感情に揺れ動きながらも，現実を受容するに至る。しかし，この父娘のそれは，笠原 (1977) の言う「異常悲哀反応」の状態にあった。笠原 (1977) は“異常悲哀反応とは，愛する者との死別ののち，必ずしも死者とは関係のない苦悩を反復円環的に延々とくりかえす。（略）無力感，無用者感，出口のないいらだちが悪循環的に症状の度を深める”と述べているが，筆者がこの父娘と出会った時がまさに「悪循環」の様相を呈していた時期であった。

また，本事例の少女のカウンセリングにおいては描画 (drawing) を援用したのだが，カウンセリングにおける描画は，心理検査として用いるだけではなく，コミュニケーションの一つの手段でもある。そして，そのコミュニケーションによってクライエントが危機的状況を脱して精神的成長が促進される場合がある。やまだ (2000) は“愛する人を喪失したときは，人生の物語をもっとも必要とするとき”であると指摘し，更に“死者も幸せで悔いがない，生きて残された人々も幸せで悔いがないと思えるときに，物語化が良い方向に動く”と論じている。そこで，本事例のカウンセリングでは，描画という非言語的表現を媒介に，クライエントの言語化を促し，更に，母親を（父親にとっては妻を）物語り (story telling)，家族を物語ることによって，過去と向き合い，母親（妻）の死というライフ・イベントの意味付けの再構築を行った。

尚，本稿では，少女が描いた絵を筆者が模写したものを掲載する。そのため，少女の絵のオリジナリティや芸術性は損なわれてしまった。しかし，筆者は，中井 (1976) の言う「芸術療法における関与しながらの観察」を重視し，“患者の筆先，指先のうごきを追体験しながら，時に模写しつつ眺めると一見些細な細部の重要な意味が明らかになる”ことを目指したのである。また，事例を紹介するにあたって，事例の解釈に差し障りのない範囲で情報を適宜変更し，プライバシーの保護を徹底して行ったことも併せて述べておく。

事例紹介

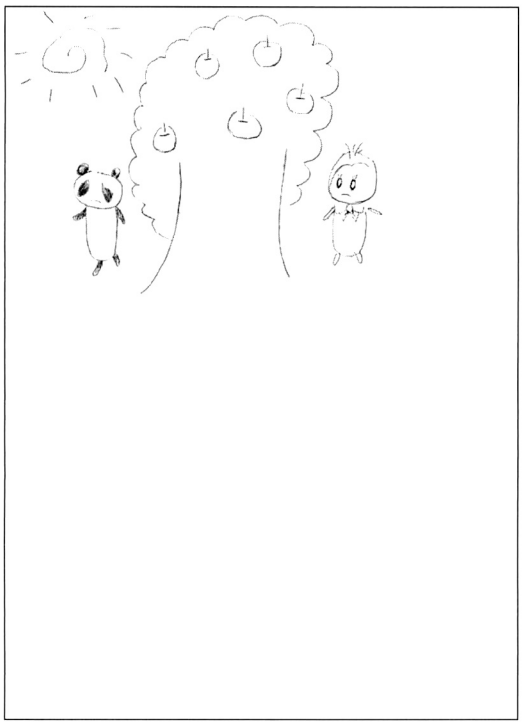
本事例の登場人物は，A 子さん，父親，母親，叔母，担任，部活の顧問，部活の仲間，そして臨床心理士の筆者である。月に 1 回の無料の公共相談であり，場所は公共機関内の一室である。初回以外は原則として，A 子さんと筆者の 2 人だけの 40 分の面談を行い，A 子さんとの面談の直後に，父親と筆者の 2 人だけの 20 分の面談を行った。カウンセリングは各々7 回，約 7 カ月に亘り展開した。

援助方針については，筆者は，通常は言語の遣り取りを時間をかけて行い，支持的 (supportive) に接して洞察 (insight) を促すというアプローチを取っている。しかし，本事例では，月に 1 回という制約があり，A 子さんも父親も言語化が難しいタイプであったため，描画を導入することで話題を共有し，問題解決型 (solution focused approach) の具体的な指示 (direction) を出すよう努めた。また，家族とその周辺の人々を援助資源 (social resource) と捉えて，連携するよう努めた。

以後，カウンセリングの回数を「＃ 1：A 子さん」「＃ 1：父親」等と表記する。更に，A 子さんと父親およびその他の人物の発言は「　」で表記し，筆者の発言は〈　〉で表記した。また，A 子さんがどの面談でどの絵を描いたかを，表 1 に表す。

表 1.　各面談で描かれた絵

回	＃ 1	＃ 2	＃ 3	＃ 4	＃ 5	＃ 6	＃ 7
絵	A	なし	B	C	D	E	なし



絵 A

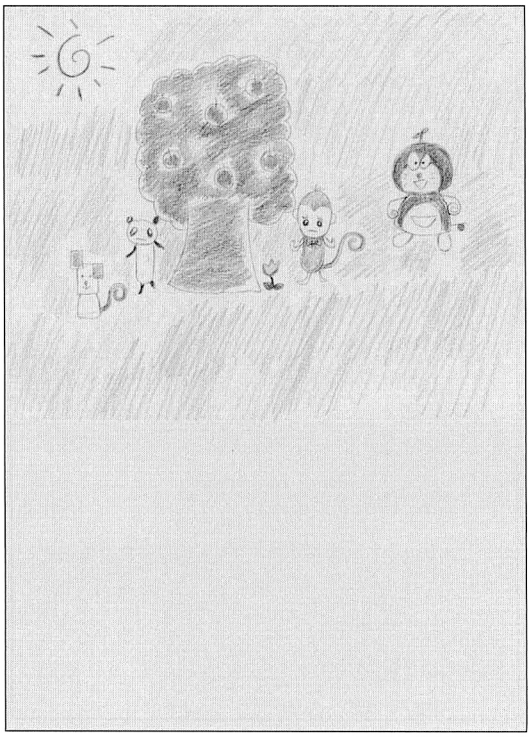
母を亡くしてひきこもる 15 歳の少女の物語
メイン・ストーリー

 # 1：A 子さん　中学 3 年生の A 子さんは，初回は，ずっと俯いていた。筆者の質問にも「ええ」「まあ」という必要最低限の言葉でしか応えてくれない。反抗的というよりも無気力という印象であった。A 子さんの心理検査の受検は父親の強い希望であり，筆者は〈嫌なら無理して受けることはないよ〉と伝えたのだが，A 子さんは「受けてみようと思います」と小声で呟いた。

さて，A 子さんが来談した経緯は以下の通りである。中学校にも通わずに家にひきこもって無為な生活をしていた A 子さんであるが，突然，近所のコンビニエンス・ストアで安い化粧品を万引きし，そのことで父親と喧嘩をして，家を飛び出してしまったのである。そして，テレクラで知り合った男性に会いに行き，その男性の車に乗る乗らないで押し問答になった挙句に A 子さんは殴られてしまったのである。幸いにも，それを目撃した通行人が警察に通報し，A 子さんは無事，警察に保護された。尚，その男性は逃亡し，A 子さんと父親の「騒ぎにしたくない」という訴えから，逮捕されるには至らなかった。「娘の気もちが全くわからない」と訴える父親に，担任が「父娘でカウンセリングを受けてはどうか？」と勧めた。そこで，父親は A 子さんを連れて筆者の元を訪れたのであった。

A 子さんはお父さんと二人暮らしである。母親は，A 子さんが小学 6 年生の秋に内臓の疾患のため入院をした。その頃に A 子さんは初潮を迎えたが，「自分で何とかしたようです」と父親はこの後の面談で語った。A 子さんが中学 1 年生の夏休みに，母親は闘病の末に亡くなった。母親の入院中，A 子さんはお見舞いに行くことを嫌がったそうである。母親を亡くしてから，A 子さんは学校を休みがちになった。そして，母親の位牌に手を合わせることをしない A 子さんに，父親は憤りを感じていた。もともと，A 子さんはおとなしい性格であったが，母親を亡くしてからは，ますます無口になった。父親もまた寡黙な人物であり，A 子さんによると「今，家の中ではテレビの音しかしない」と語った。

そして，中学 2 年生の 1 学期には，A 子さんは友人と些細なことで喧嘩をし，いっそう学校に行きたがらなくなった。それでも，所属していた軽音楽部



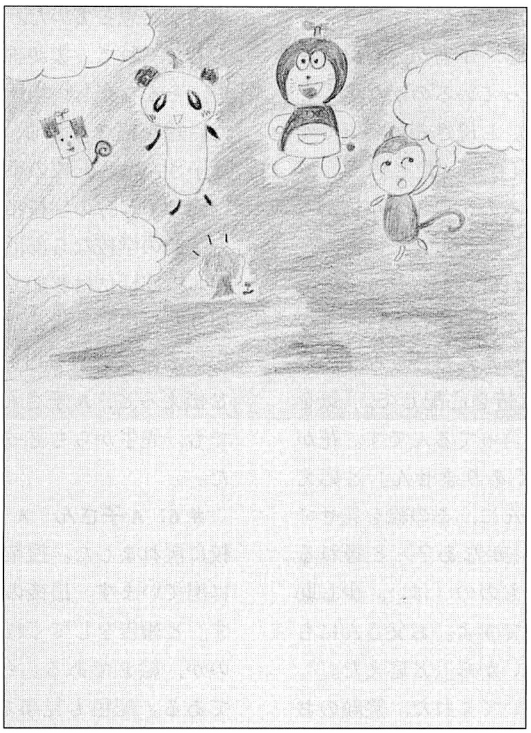
絵 B

には，中学 2 年生の夏休みまで休まずに参加し，全国大会にも出場した。しかし，「授業には出ないくせに，部活には出ている」と友人から非難され，A 子さんは中学 2 年生の 2 学期からは完全な不登校になり，やがてひきこもってしまった。中学 3 年生になっても，家で無為に過ごしている A 子さんを見かねて，父親は「学校を変えれば，通学するかもしれない」と思いつき，A 子さんには無断で転校の手続きをした。しかし，A 子さんは新しい中学校には 1 日しか行かなかった。

初回の面談で A 子さんが描いてくれたのが絵 A である。A4 用紙の上の方に，鉛筆で，浮かんだように木と動物の絵が描いてある。筆者は，バウムテストを実施したのであり，紙と鉛筆と消しゴムだけを渡し，〈一本の実のなる樹を自由に描いて下さい〉とだけ教示した。

通常，筆者は，クライエントが絵を描いてくれた場合，「解釈」や「分析」というものとは別ものである「感想」を，しかもポジティブな感想を伝えることにしている。しかし，この絵 A を見て，筆者は何と言葉をかけていいのかわからず，困ってしまった。テストバッテリーとして施行した SCT（文章完成法テスト）に目を通してみた。A 子さんは，ほとんどの回答を「わからない」「特にない」等としていた。時折見られる文章では「(家では) ほとんど自分の部屋にいる」というように現在形で回答していたが，一つだけ過去形で書かれている文章があった。「(お母さん) はとてもやさしかった」である。結局，この初回面談で筆者は A 子さんに〈頑張って心理検査に取り組んでくれてありがとう〉としか伝えることができなかった。そして，筆者が〈また来月，お話しに来てくれるかな？〉と尋ねると，A 子さんは小声で「はい」と答えたのである。

 # 2：A 子さん　筆者は，SCT の文章と絵 A を見ていて感じたことを A 子さんに慎重に話しかけてみた。〈このパンダは，お父さんにそっくりだね〉すると俯いて無表情だった A 子さんが，顔を上げて少しだけ微笑んだ。〈このお猿さんは，A 子さんなのかな？〉A 子さんは微笑みながら頷いた。筆者はドキドキしながら質問を続けた。〈すると，この優しい感じの樹は，お母さんかな？〉A 子さんは微笑みながら下を向いてしまった。ここからは，より慎重に進めなければならない。筆者の解釈に A 子さんが同意してくれたとしても，筆者が A 子さん



絵C

の無意識を不用意に暴くことで，A子さんの不安を煽ったり精神的動揺を激しくさせるようであれば，方針を変えなければならないからである。しかし，A子さんは，筆者の解釈をもっと聴きたがった。そして，筆者は続けた。〈なんだか，お父さんもA子さんも，お母さんから離れられなくて，気もちだけが一緒に天に昇っているようだね〉。A子さんは少し表情を強張らせて下を向いてしまった。

ここで筆者はある提案をした。それは，本来のバウムテストから逸脱してしまうものである。〈次回はこの絵の続きを描いてみようか？〉と提案したのである。すると，A子さんは頷いて，やっと話し始めた。「私，実は漫画を描くのが好きで，家でノートに描いています。下手な落書きですけど」。それを聴いて，筆者はもう一つの提案をした。〈じゃあ，この絵から出発して，4コマ漫画みたいなものを描いてみようか？〉。A子さんはにっこり笑って頷いた。

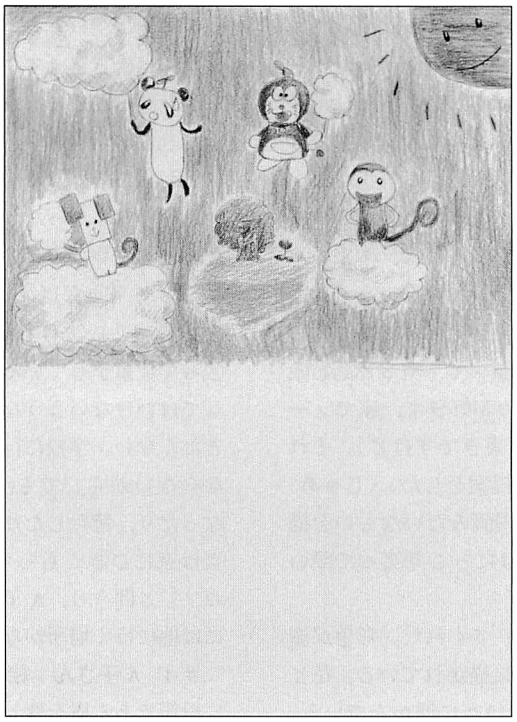
＃3：A子さん　絵Bを描いてくれた。彩色が施されており，前回よりも丁寧に描かれている。花と犬とドラえもんが加わり，青い空に浮かんでいる。下の部分は空白である。A子さんは「前回は，デタラメに描いた絵なので，もう一度描き直しました。それから，絵本みたいに物語が書き込めるように，下の部分は空けました」と語った。絵の下の部分には直接は書き込まず，その時その時に思い浮かんだお話を語ることになった。A子さんは，今回は，絵を描きながらいろいろな話をしてくれた。A子さんは「お父さんは，お母さんが死んでから厳しくなった。笑わなくなった。お父さんは私に『お母さんが死んだのに平気な顔をしている』と怒るけれども，私だって平気なはずがない。お母さんが死んでしまって寂しい。けれども，お父さんが前よりも頑張って仕事をしているのを見ると，私は悲しい顔をしてはいけないような気がしてくる。…学校には行きたくない。学校に行くと，作り笑いをしなければならないから。でも，独りで部屋にいると寂しくなったり，苛々したりする」と語った。筆者が〈本当は家にひきこもっているのは寂しくて辛いんだね？〉と問うと，A子さんは「うん。けれども，私には他に行く場所がない」と応えた。

＃4：A子さん　絵Cを描いてくれた。緑の野原に母親である樹を残して，ドラえもんと一緒に皆で青い空を飛んでいる。絵Aや絵Bのように，ふわ

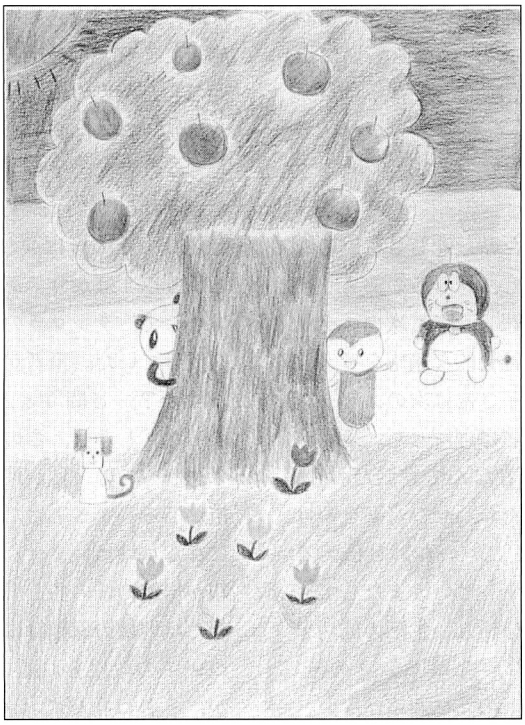
ふわと漂っているのではなく，「タケコプター」を使って自分の意志で飛んでいる。筆者が〈お母さんが何か言っているね。寂しがっているのかな？〉と尋ねると，A子さんは「うん。お母さんは病気で死んで，苦しかったと思う。寂しかったと思う。でも，私はお母さんが痩せていくのを見るのが怖かった。だから，お見舞いにも行けなかった。でも，今はもっとお見舞いに行っていれば良かったって後悔してる。きっと，私がお母さんに会いたかったように，お母さんも私に会いたかったんだろうな。…でも，この絵では，お母さんは皆を心配して，『気をつけて遊んできなさい』って言ってるんです。花があるから，お母さんは寂しくありません」と応えた。そして，筆者が〈お父さんに，この絵を見せて物語を聞かせてあげてもいいかなあ？〉と尋ねると，A子さんは少し躊躇したものの「はい。少し恥ずかしいですけれども，いいですよ。お父さんにも私の気もちを知ってもらいたいから」と応えた。

＃5：A子さん　絵Dを描いてくれた。笑顔のお陽様が加わった。A子さんは「お母さんは，もう心配していません。楽しく遊んでいる皆を見守っています。この絵の場所は，最初は寂しくて暗くて寒い場所かと思っていた。でも，お陽様が皆を温かく照らしてくれて，雲が綿菓子になってとっても美味しい。そんな楽しい場所だってわかりました」と語った。絵を描きながら，A子さんと学校の話をした。A子さんは「転校の手続きは，お父さんが勝手にしたんです。今の学校には，行きたくありません。でも，前の学校なら部活の顧問の先生もよくしてくれたし，部活には参加できると思います。前の学校に戻りたい…」と訴えた。そこで，筆者は，A子さんに〈その気もちを自分でお父さんに言ってごらん〉と伝えると，A子さんは「…自分で言ってみます。でも，先生からも言って下さい」と応えたのであった。

＃6：A子さん　A子さんは開口一番に「前の学校に戻れました。授業には出られないけど，部活には出ています。最後の県大会に向けて練習しています」と報告をしてくれた。この面談で描いてくれたのが，絵Eである。今回は画用紙いっぱいに描いてある。配色も見事である。鮮やかな青空を背景に，母親である樹は緑の大地に根付いた。A子さんは「この野原には，花も沢山咲いているのでほっとできます。私もお父さんも，お母さんといつまでも



絵D



絵E

一緒です。でも，ドラえもんだけが，どこかへ行ってしまうの」と語った。更に，「この犬は私が昔に飼っていた子です。死んじゃって悲しくて悲しくてもう二度と犬は飼わないと思ってた。でも，この子のことを大切な思い出にしながら，また新しい子を飼いたいなあ」と語った。その時，筆者は〈A子さんは，もう大丈夫かな〉と感じたのである。そこで，〈A子さんも落ち着いてきたみたいだし，次回を最終回にしようか？　次回までに，絵本の文章を考えておいで〉と筆者は寂しい提案をした。

＃7：A子さん　筆者はA子さんの待っている面談室に向かった。すると，面談室から笑い声が聞こえてきた。私を待っている間，女性職員とお喋りを楽しんでいたのである。ほとんど押し黙っていた初回からは考えられない変わりようである。筆者は，まず部活のことを尋ねた。すると，A子さんは嬉しそうに，鞄から雑誌を取り出して，「県大会の出場が決まったんです。今，猛練習で大変です。ウチの部の写真がこの雑誌にも載ったんですよ。私も小さいけど写っています。でも，小さすぎてどれが誰だかわからないって皆で笑ってるんですよ」と語った。A子さんにつられて自然と筆者も笑ってしまった。A子さんは「実はお母さんも音楽をやっていたんです。だから，私が音楽を続けることを応援してくれていると思う。…全然勉強していなかったから無理だと思うけど，音楽科がある高校を受験しようと思っているんです。実は…そこに好きな先輩が通っているんです」と語った。筆者が〈そこまで想われるその先輩が羨ましいなあ〉と言うと，A子さんは「あ，もちろん，先生のことも好きですよ」と言って，二人で大笑いをした。

さて，名残惜しいのだが，終了時間である。筆者は，〈やはり絵本の文章は書き込まないことにしようか？　1年後，5年後に違う物語が思い浮かぶかもしれないものね〉と提案した。それにA子さんも同意した。最後に，筆者が〈今は全国大会に向けて，練習に励んで下さい。その後は，受験だね。A子さんの希望が叶うかどうかはわかりません。でも，この半年で色々なことを経験して乗り越えてきたんだから，これからも何があっても乗り越えていけそうだね。でも，挫けそうになったらまたおいで〉と伝えると，A子さんは「はい！」と元気な返事をした。

A子さんと父親とのカウンセリングを終えて，数

カ月後のことである。A子さんから筆者の元に電話があった。電話でのA子さんの声は落ち着いていた。「お久しぶりです。高校受験，第一希望はダメでした。勉強してなかったから，しょうがないです。でも，別の高校に行くことになりました。そこで音楽を続けます」と語った。

高校受験など何かに失敗した時，悲しさを感じるのは当然のことである。しかし，悲しみのあまり動きがとれないままでいるか，悲しくても次のステップを踏み出せるかどうかは，社会的な適応を考えた場合，大きな違いがある。A子さんは次のステップに踏み出せたと，この時の筆者は理解した。筆者が〈ちゃんと報告の電話をくれるなんて立派だね。4月からの新しい生活が楽しみだね。ぜひ音楽を続けて，今度は大きな写真が載るといいね〉と伝えると，A子さんは「はい！必ず！」というまたしても元気な返事をした。A子さんの新しい生活の成功を願いながら，筆者は電話を置いた。幸い，その後，十年以上経過しているが，筆者の元に連絡はない。

妻を亡くし娘の問題行動に悩む父親の物語
サイド・ストーリー

＃1：父親　大工の父親は，仕事の合間に作業着のまま娘を連れて来談した。30代半ばという年齢にしては老けて見える。厳つい表情をして「娘をよろしくお願いいたします」と何度も頭を下げる父親に対して，筆者は謹厳実直という印象を受けると同時に，特徴的な垂れ目もまた印象に残った。

筆者と二人だけの面談になると父親はきつく口を閉じ，押し黙っていた。ようやく口を開くと，父親は「娘がこうなってしまったのは，私のせいです。私が悪いのです。申し訳ありません」と訴えた。筆者が〈理由はどうであれ，娘さんがしたことは娘さんが自分で責任を負わなければならないはずですよ。お父さんが謝って済むことではありません〉と伝えると，父親は「いえ，私が娘のことがわからないから…いえ…私には親子というものがわからないから，こうなったんです」と更に訴えた。そして，父親は訥々と語り始めたのである。「私には身寄りがいません。物心ついたときには施設にいました。中学を卒業すると施設を出なければならず，資格を取って，働き始めました。しかし，当時は世を拗ねて，チンピラのような生き方をしていました。そんな時，妻と出会ったのです。妻も妹がいる以外は，施設にこそ入らなかったものの，私と同じような境遇でした。妻の両親は素行が悪く，妻は家を飛び出し，妹以外とは交流を絶っていました。妻は明るいしっかり者で，子育てはすっかり妻に頼っていました。それなのに，まさか病気で死んでしまうとは…」と語り，その後は涙ながらに「申し訳ありません」と繰り返すばかりであった。

そして，テレクラの件では父親もひどくショックを受けていた。筆者が〈テレクラのことをどう思いますか？〉と問うと，父親は「全く思いもよらなかった。しかし，このまま終わりにしてはいけないと思うものの…私が性的なことを娘に教えるのは抵抗がある…」と応えた。そこで，筆者は〈誰か頼りになる女性はいませんか？〉と問うた。もしも，父親が母親の妹の名を挙げなければ，筆者は女性職員または地域の保健師に，A子さんに女性の「性」についての教授をお願いしようかと考えていたのだが，それは杞憂で済んだ。筆者の問いに，父親は〈妻も私も親戚が少なくて…。でも，最近は交流がないのですが，A子がよく懐いている叔母がいるので，叔母に事情を話して，A子を諭してもらいます〉と応えたのである。

また，「勝手に転校をさせたのも大失敗だった」と悔やむ父親に，筆者は〈お父さんなりに心配してのことですよね。娘さんを思っての行動力は素晴らしいものですよ〉と労った。

＃2：父親　父親は「娘が学校にも行かずに，家でゴロゴロしているのを見ると，情けないやら悲しいやら，何とも言えない気もちになります」と訴えた。更に，「そもそも，娘は妻の見舞いにもあまり行かなかったし，今でも妻の位牌に手を合わせることすらしない。一体どういうつもりなんでしょうか」と語った。筆者が〈頭にきますか？〉と尋ねると，父親は「そりゃあ，頭にきますよ。妻は頑張って病気と闘っていたのに，A子は最後の最後は見舞いに来なかったのですから。妻の位牌に『水をあげて』とA子に頼んでも，知らん顔なので，本当に腹立たしいです」と語った。筆者が〈A子さんとお母さんはうまくいっていなかったのですか？〉と問うと，父親は「いえ，本当に仲の良い母娘でした。何をするのもいつも一緒で，A子もいつまでも『お母さん，お母さん』と甘えていました。それなのに

一体なぜ，こんな…」と声を詰まらせた。筆者が〈入院していた奥さんが衰えていくのを見ていて，お父さんはどう思いましたか？〉と問うと，父親は「それは辛かったですよ。しかし，夫婦ですから，家族ですから，見届けなければならないでしょう」と応えた。更に，筆者が〈でも，A子さんにとっては大好きなお母さんが衰えていくのを見ることができなかったのかもしれませんね。初潮を自分で何とかしたのも，病気のお母さんに相談して心配させたくなかったのかもしれません〉と伝えると，父親は「そういう考えもあるんですね」と小さく呟いた。そして，筆者は〈A子さんはとても優しい子ですよ。良いところもたくさんあるはず。それはお父さんも知っていますよね。A子さんの良いところを褒めてあげて下さい〉と伝えた。

尚，この時の面談で，父親は「叔母が涙ながらに娘にテレクラの件を注意してくれました。娘も大泣きをして，『ごめんなさい，もうしません』と謝ったそうです」と語った。

＃3：父親　父親は「カウンセリングで教わったように，A子の良いところを見つけて褒めてみることにしたんです。A子は食器洗いと洗濯はしっかりやってくれるので，『いつも，ありがとう。助かるよ』と言ってみたら，A子も満更でもない顔をしていました。今までは，全く無言だったのですが，『ああ』とか『うん』とか返事をしてくれるようになったのは，それからです。もっとも，私は仕事が忙しくて，あまりA子と顔を合わせる時間はないのですが」と笑顔で語った。

＃4：父親　父親にA子さんの絵を見せて物語を聴かせると，「あの子が，こんなお話を作るなんて…。やっぱり，A子も母親のことを忘れてはいないんですね，安心しました」と語った。更に，父親は「…昔，私は，妻とA子から『垂れ目のパンダ』とよくからかわれました。それにしても先生はよくこのパンダが私だとわかりましたね」と言うので，筆者が〈お父さんの垂れ目はとてもチャーミングですよ〉と伝えると，父親は苦笑していた。

そして，筆者が〈ところで，相変わらずお忙しいのですか？　…奥さんが入院していた頃は忙しくてもお見舞いに行けていたのでしょう？　それならば，今でもA子さんと向き合う時間は作れますよね〉と直面化を試みると，父親は「…その通りです。A子と向き合うのが怖いんです。また何か問題を起こしたらと考えると心配になってしまいます。…それに，A子は妻によく似ている…。A子を見ると妻を思い出してしまう。そうすると，妻に責められているように感じてしまう。自分のせいで妻の人生は台無しになってしまったのではないかと自分でも思います。今でもそんなことばかり考えているのです。だから，仕事に没頭している時の方が何も考えずに済むので，楽なのです」と語った。

＃5：父親　父親は落胆した表情で「A子は相変わらず学校にも行かないどころか，外出もしない」と訴えた。筆者が〈A子さんにお小遣いを与えているのですか？〉と尋ねると，父親は意外な顔をして「いいえ，あの万引きと家出の一件以来，お金は渡していません。家にお金を置かないようにしています」と応えた。そこで，筆者が〈お金は外の世界との接点になります。お金がないとA子さんは好きな漫画もお菓子も買えません。いつかは与える日が来るのですから，今，A子さんを信用してお小遣いを与えても良いのではないでしょうか？〉と提案すると，父親は「お金を持ってまた飛び出してしまうのではないかと不安でもありますが，今の娘なら大丈夫そうにも思えます。…お小遣いを与えることにします」と応えた。

また，筆者からA子さんが前の学校に戻りたがっていることを伝え，〈前の学校に戻ることができるかどうか，両方の学校に相談してはどうですか？〉と提案した。すると，父親はすぐさま前の学校に戻る手続きをすると応えた。そこで，筆者が〈A子さんは自分でお父さんに伝えると言っていたので，それを待って，今度はしっかり話し合いをして下さいね〉と伝えると，父親は「わかりました」と請け負ったのである。

＃6：父親　父親は「娘が前の学校に行くようになりました。張り切って部活に出ています。顧問の先生もよく面倒を見てくれています」と笑顔で語った。更に父親は「A子が『お父さん，お小遣いをありがとう』って言ったんです。A子は，そのおかげで部活の帰りに仲間とファーストフードに寄ってお喋りをすることができると喜んでいます。娘を疑って申し訳なかったと今では思います」と語った。

そして，絵Eの物語を聞いた父親は「妻に辛い思いをさせたと申し訳なく思っていたけれど，この

絵を見て，妻はあの世で元気にやっているんだと思えます。きっと本当に妻は私たちのことを見守っているのでしょうね。A子は家族の楽しい思い出を忘れずにいるのですね。私も妻とA子との楽しい思い出を何度でも思い出してみようと思います」と語った。

#7：父親　父親の表情は穏やかであった。父親は「学校が特別教室を用意してくれました。娘は，保健室にしか登校できない子たちと一緒に勉強しています」と語った。更に，「しかも，A子は進学する意欲も出てきたみたいで，勉強も頑張っています」と笑顔で語った。更に父親はA子さんの今までの絵を一通り眺めて，感無量と言った様子であった。そして，「本当は，娘は私よりもしっかりしているのかもしれません。…私の方が忙しさにかまけて妻のことを忘れようとしていたのかもしれません。A子のように活き活きと妻のことを思い出すことをしていませんでした…。私は妻の死後は形式的なことにばかりこだわって，娘を叱りつけていたのに，娘は私のこともこうして毎回の絵に登場させてくれたんですね」と涙を流しながら語った。

そして，筆者が〈A子さんが新しい犬を飼いたがっていますよ〉と伝えると，父親は「A子と同じで私も前の犬が死んでからはもう飼うまいと思っていました。でも，こうしてA子が死んだ妻のことも前の犬のことも今でも家族として大切にしていることがわかりましたし，そうできるのですね。また，犬を飼おうかなあ」と言って笑った。更に，父親は「最近は，妻が生きていた頃のように家の中が明るくなりました。近頃のA子は『お父さん，こうじゃなきゃダメよ』『ああしたほうがいいよ』等と口やかましくて，妻にそっくりです」と言って苦笑いをした。筆者が〈A子さんとお母さんは親子ですから〉と応じると，父親は「そうかあ。この樹は妻でありA子でもあるんですね。妻は妻とそっくりなA子を遺してくれたんですね」と語った。

最後に，父親は「このドラえもんは先生ですよね」と言うので，筆者は本心から「いいえ，違うと思います。これは『本物のドラえもん』だと思います」と応えると，父親は「はあ」と首を傾げた。そして，筆者が〈何かあったら，必ずまた連絡を下さいね〉と伝えると，父親は「わかりました。ありがとうございました」と言い，お互いに深く頭を下げて，終結となった。

考　　察

不登校もひきこもりもうつ状態を伴って遷延化しやすいものであるが，本事例では比較的短期間で問題解決に至った。山本 (2000) は“相談機関で短期に終結しているケースには，意識的または理論的ではないが危機介入 (crisis intervention) を結果的にとっている場合が多い”としているが，本事例の場合は，筆者は意識的に危機介入を行った。平衡を保っていた心の状態をゆさぶる事態を難問発生状況 (hazardous environment) と呼ぶが，本事例では少女と父親ともにそれは喪失 (loss) であった。そして少女も父親も，この難問発生状況に対して，今まで身につけてきた対処レパートリーから解決方法をあれこれ使おうとしたが，どれもこれもうまくいかない状態が続いたのである。そして，“そこに更に追い討ち的な出来事が重なることで，危機状態は現実化することが多い。この追い討ち的な出来事を，追い込み因子または結実因子 (precipitating factor) と呼ぶ”（山本，2000）のだが，本事例の場合は，「強制的な転校」がこれに相当し，危機状況が発生したのである。

筆者はこの危機状況は少女も父親も，喪の作業 (mourning work) ができていないために生じていると判断し，介入を行った。その際，筆者は葬式のような「儀式」が必要であると考え，カウンセリングという安全な状況下において描画を実施したのである。Junge (1987) は，描画による物語づくりは“人生と同じように始まりと終わりがあるため，死によって生じた喪失感に対処する象徴的な方法を提供することができる”と論じているが，本事例においても安全かつ象徴的にトラウマの反復再現を行うことができた。つまり，絵Aで「死んだ家族」が，ゆっくりと再生を遂げ，絵Eに至って「生き返った家族」になったのである。人間関係において，人は死んでしまうとその関係が消えてしまうものではない。むしろ，大切な人の死後に，何度も何度も繰り返し繰り返し思い出すことで，自分とその死んだ大切な人との関係が改めて構築されるのである。やまだ (2000) は，物語について，“変えられない過去の事実を納得させる方法であるとともに，自己の志向を過去から未来へ向け変える時間軸の転換をする

働きをもつと考えられます。過去を変えることはできませんが，未来は変えられますから，現状を変えていく力を回復することができるのです”と述べているが，本事例の少女と父親においても未来志向(future oriented)の力が生じたのである。

また，少女と父親が悪循環に陥った理由は，父親がまず喪の作業ができていなかったからではないだろうか。Holmes・Rahe (1975)が行った有名な研究を引き合いに出すまでもなく，「配偶者の死」は非常にストレスフルなライフ・イベントである。それでも，父親は妻の闘病中から毅然として振る舞い，妻の死後も涙も見せずに仕事に精を出した。却って，そのせいで少女はどうしてよいのかわからなくなってしまったのではないだろうか。Bowlby (1980)は，「児童期と青年期における親の死」の研究の中で，“ある男児の母親は，父親の死に対してその子どもが涙を流さないでいることを叱りつけた。すると少年は「どうしてぼくが泣けるの」といい返した。「ぼくは，ママの涙をみたことがないのに。」”と報告しており，そうした状況では，子どもが親の死について疑問や悩みを抱いても黙殺されやすいと指摘している。本事例においてもそれと同様の事態が生じたと考えられる。父親は，カウンセリング場面では，娘の絵の力を借りて実に豊かに感情を表出したのであるが，そうした父親の変化を受けて少女も変化したものと考えられる。

更に，やまだ(2000)は，通常は「生殖性」とか「世代性」と訳されるEriksonの造語「generativity」を「生成継承性」と訳し，“生成継承性の高い人たちは，「悪いことも当然ある，しかしそれが良くなった」という救済（あがない）シーケンスで語ること”を見いだした。救済シーケンスとは，例えば，本事例のように母親の死によって家族が親密になったというような変換が生じる物語のことである。少女の絵の力によって，父親は娘に妻の面影を見たのであり，まさに，妻の存在が娘の中に生成され継承されていたのである。

A子さんは，母親の闘病中に初潮を迎え，「女性」への道を歩み出した。母親から女性性を継承したのである。しかし，A子さんは母親から授かった性を誤まって使ってしまった。テレクラである。A子さんは，母からの授りものを滅茶苦茶にしてしまいたいほど，投げやりな気もちだったに違いない。ここで母親の妹というまさに母親の血を継ぐ者がA子さんを諭したことは非常に象徴的であると同時に良い効果をもたらしたと言える。叔母のような存在を援助資源と呼び，こうした周囲の人々からの援助をソーシャル・サポート(social support)と呼ぶが，これらを最大限に活用することも危機介入においては重要なことである。

さて，描画やロールシャッハテスト等の投映法の内容分析においては，個々のアイテムの解釈もまた重要であるが，難解である。筆者は少女の絵に登場した「ドラえもん」について，長年考え続けていたが，ドラえもんは，やはり子どもにとっての「救い」の象徴であると解釈している。シンボルやイメージやメタファーというものは多義性があるからこそ有益なのであり，一義的に特定の何かに置き換えない方が良い場合が多い。ここで仮に「ドラえもんは筆者である」としてしまうと，国民的ヒーローであるドラえもんという「象徴」がもつ多様な意味世界の広がりを限定してしまいかねないし，筆者などに例えられたら，ドラえもんのヒーローとしての価値が下がってしまう。描画は退行を促進するが，中学3年生の少女による「ドラえもん」というファンタジーの語りに付き合うのがカウンセリングであり，「ドラえもんだけが，どこかへ行ってしまうの」という語りの中に，彼女が現実と対峙する覚悟を見つけることができたからこそ，筆者はカウンセリングの終結を決めたのである。ドラえもんはドラえもんで良いのである。

謝辞

A子さんとお父様はカウンセリング終結時に絵を筆者に託し，家族の物語を公表することをお許し下さいました。そのおかげで筆者はたくさんのことを学ぶことができました。心より感謝申し上げます。

文　献

ボウルビィ，J.，黒田実郎・吉田恒子・横浜美恵子（訳）1981 母子関係の理論 III 対象喪失 岩崎学術出版社
(Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss, Vol. 3 Loss: Sadness and depression.* The London; Tavistock Institute of Human Relations.)

Holmes, T. H. and Rahe, R. H. 1967 The social readjust-

ment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.

Junge, M., 鈴木　恵（訳・解題）1987 父親の死について描かれた本―家族員の死とそれに取り組む遺族を援助するための予防としてのアートセラピー― 臨床描画研究　**IV**, 113-128.

笠原　嘉 1977 青年期　精神病理学から　中公新書.

小此木啓吾 1979 対象喪失　悲しむということ　中公新書.

ラム，J. L., 土屋京子（訳）1995 エンド・オブ・サマー 講談社

(Lamb, J. L. 1995 *The End of summer.* New York: Morris Agency, Inc.)

中井久夫 (1976)：“芸術療法”の有益性と要注意点　芸術療法，**7**, 55-61.

須田　誠 2011 ひきこもりの少年の描画―イメージ・メタファー・シンボルの解釈―　福島学院大学大学院附属心理臨床相談センター紀要，**5**, 33-40.

やまだようこ（編著）2000 人生を物語る　生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房.

山本和郎 2000 危機介入とコンサルテーション　ミネルヴァ書房.

（受稿：2011.6.17; 受理：2012.5.25）